

言語間における事態の描き方の相違についての一考察

著者	伊藤 創
雑誌名	研究紀要
号	16
ページ	1-12
発行年	2015-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1084/00000421/

言語間における事態の描き方の相違についての一考察

A consideration of the differences between languages in terms of the ways of describing events or situations

伊 藤 創*
Hajime ITOH

Abstract

Recently, researchers have been claiming that in the Japanese language, subjective description is preferred, whereas in the English language, objective description is preferred. This paper considers that the difference between the two languages can be attributed to the level of description or the difference stems from the difference in the level of construal. By evaluating this consideration, I point out that the possibility that at least the differences of descriptions using “noun modifiers” and “relative tenses” between English and Japanese do not stem from the differences concerning the level of the perception but rather are just the result of the difference in the syntactic and semantic systems of these two languages.

キーワード：主観的・客観的事態把握, 名詞修飾節, 相対テンス, 認識

I はじめに

同じ事態でも言語によってその描き方に様々な違いが見られるのは言うまでもない。例えば、以下の(1)(2)のような日英語の文を比較しただけでも、

- (1) a. By the time food came, I got drunk.
b. 食べ物が出てくる前に、酔っぱらってしまった。
(2) a. My neighbor made a lot of noise all night, so I couldn't sleep at all.
b. 隣で一晩中騒がれて、一睡もできなかった。

(1) では、従属節の述語が英語では過去形(「came」)であるのに対し、日本語では非過去形(「出てくる」)であったり、(2) でも、同じく従属節の事態が、英語では能動形で描かれている(「made a lot of noise」)のに対し、日本語では受動態で表現されていたり(「騒がれる」)と様々

* 関西国際大学教育学部・共通教育機構

な相違が見られる。また(1)(2)のいずれの文においても、主節の表す事態の行為の主体が、英語では「I」という形式で明記されるのに対して、日本語では示されていないという違いも見られる。

こうした違いは、これまでも様々な観点から論じられてきたが、近年、特に注目を集めているのが、英語は客観的な事態把握に基づいた描写を好み、日本語は主観的な事態把握に基づいた描写を好む、という指摘である(池上1981¹⁾、金谷2004²⁾など)。この指摘は、それぞれの言語における事態の描き方の違いの背後には、各言語の持つ(に好まれる・に偏重される)事態把握のあり方の違いがあるとするもので、上記(1)の時制(tense)、あるいは相(aspect)形式の違い、(2)の態(voice)の違い、また、両者に見られる主語の明示の有無といった、これまで個別に扱われてきた日英語の違いを統一的に説明できる可能性を秘めている。

英語などに見られる客観的な事態把握に基づいた描写とは、ある事態を描く際に、当該の事態の参加者の目から離れた俯瞰的な視点から捉えているように表現する描写のあり方である。一方、日本語においては、同じ事態を描く際にも、その事態の経験者(参加者)として内側からの視点を通して見ているような事態の描き方が好まれるとされ、このような描き方が主観的な事態把握に基づいた描写と言われる^{注1}。

両言語がこのような異なった事態把握のあり方に基づく描写を好むという視点にたてば、例えば(1b)において、英語話者が過去形で従属節の事態を描き、一方日本語ではそれを非過去形で描くという事実に対して、英語話者は、当該の出来事を発話時点から切り離し、過去の出来事として客観的に捉えているために過去形を用い、一方、日本語母語話者は、過去の出来事であっても、その事態に経験者として入り込み、酔っぱらってしまった時点、すなわち料理が出てくる前の時点で視点を設定しているゆえに非過去形を用いる、と説明を与えることができる(樋口2001³⁾参照)。

同様に、(2b)においても、従属節の事態が、英語では能動態、日本語では受動態で表現されるのは、英語では、〈隣人が騒いだ〉という事態と、〈私が眠れなかった〉という事態を、事態の参加者である〈私〉の目から離れて客観的に捉えるゆえに、両事態を別個の事態として述べる表現が好まれ、一方の日本語では、事態を経験している者の視点から捉えるために、〈それによって影響を被った〉ことを表す表現が好まれることの反映である、と説明を与えることができる。

あるいは、日本語において主体が表現されないのも、話者が事態の中に入り込んで〈私〉の視点から事態を捉えている(従って自らの姿は見えない)からであり、一方、事態の経験者である〈私〉から離れ、その事態を俯瞰的に眺めている英語においては、(〈私〉の姿は見えているので)、主体は明記されることになる。

このように、日本語と英語が異なった事態把握に基づく表現を好む、という観点から日本語の様々な文法的な特徴を統一的に捉えようとする研究が近年数多く見られ、また日本語教育の分野でも、こうした日本語において好まれる主観的事態把握に基づいた表現を身につけさせることの必要性・重要性が指摘され始めている(池上・守屋2010⁴⁾)。筆者も日本語教育に関わるものとして、日本語学習者に如何に日本語らしい主観的事態把握に基づいた事態の描き方を身につけさせるかを模索しているが、本稿では、こうした議論において述べられる「事態把握のあり方の相違」というものについて、それが本当に「認識」のレベルにおいて生じているものなのか、あるいは「言語表現」のレベルでの違いにすぎないのか、というあえて非常に素朴な疑問について考えてみ

ることで、議論の有効性、可能性を探ってみたい。

Ⅱ 主観的／客観的事態把握の属するレベルについて

ここまで、日英語における事態の描き方の違いに対する、事態把握のあり方の違いと言う観点からの説明について見てきた。それぞれの言語には、好まれる事態把握のあり方があり、それに基づいて事態を捉える傾向があるために、同じ事態であっても言語によって描き方（用いる文型や表現）が異なってくる、ということである。以下に守屋（2010）⁵⁾を引用しておく。

〈事態把握〉とは、人が言語化に先立って「事態」を各言語の母語話者に応じたやり方で行うと考えられる認知的な営みを指す。言語の話者によって好む仕方が異なるものであり、言語形式の選択にも大きく関わっている。

（守屋2010:29下線筆者）

しかし、ここには注意すべき点がある。それは、上記の説明（あるいは仮説）は、あくまで、日本語では、主観的な事態把握に基づいているように見える表現が多く、同様に、英語でも、客観的な事態把握に基づいているように見える表現が多い、という言語現象から帰納的に事態把握のあり方を推論したものであるということである。すなわち、日本語母語話者、英語母語話者が、それぞれ主観的、あるいは客観的な事態把握をしているように見えるのは、あくまで言語的なレベルにおいての話であり、認識のレベルでの事態把握のあり方については、あくまで言語現象からそのように推論されるだけなのである。

もちろん、言語表現に認識のあり方（＝事態の捉え方）が現れることを否定するわけではない。例えば以下のように、客観的には全く同じ事態であっても、その事態を好ましく捉えるか否定的に捉えるかによって、その描き方が変わるの言うまでもないことであり、これはまさに認識のレベルの「捉え方」が、その「描き方」、すなわち言語表現のレベルに現れていることの証左である。

- (3) a. 男性に家までついて来てもらった。
b. 男性に家までついて来られた。
- (4) a. ワインがボトルにまだ半分も残っている。
b. ワインがボトルにもう半分しか残っていない。

しかしながら、(1)(2)で述べてきたような言語表現の違いが、認識のレベルにおける主観的あるいは客観的な事態把握という違いに起因するものであるかについては疑問を呈する余地があると思われるのである。すなわち、英語母語話者である発話者が(1a)を発する時には、注文した食べ物が出て来る以前の状況に入り込んでおらず、一方、日本語母語話者が(1b)を発する際には、その時点に入り込んで発話している、と言えるのだろうか、ということである。「相対テンス」という言語形式と「主観的事態把握」という認識様式、あるいは、「絶対テンス」という言語形式と「客観的事態把握」という認識様式の間に直接的な因果関係が認められるのだろうか、

という言い方をしてもよい。

(2) についても、英語母語話者による (2 a) の発話が、より客観的に外から二つの事態 (〈隣人が騒いでいた〉という事態と〈私が眠れなかった〉という事態) を眺めており、一方、日本語母語話者による (2 b) の発話は、発話者の視点が当時の事態に設定され、より主観的にその事態を眺めてのものであるといえるか、には疑問の余地がある。

というのも、こうした違いは、単にそれぞれの言語で当該の形式の表す意味領域の範囲の違いによるものにすぎないという可能性も否定できないと思われるからである。例えば (2 a) で言えば、下記に示す様に、英語の能動態という表現形式が、〈隣人が騒いでいる〉という事態を客観的に捉えている場合も、〈騒がれて迷惑だ〉という主観的な捉え方をしていた場合であっても、いずれをも表すことができるという可能性は十分に考えられる。

日本語		
	客観的事態把握	主観的事態把握
認識のレベル	〈隣人が騒いでいるな…〉	〈うるさくて迷惑だな…〉
	↓	↓
表現のレベル	「騒いでいる」(能動態)	「騒がれる」(受動態)
英語		
	客観的事態把握	主観的事態把握
認識のレベル	〈隣人が騒いでいるな…〉	〈うるさくて迷惑だな…〉
	↓	↓
表現のレベル	made a lot of noise (能動態)	

もちろん、これらの素朴な疑問は、先の (3) (4) の例のような同一言語内で複数の形式が使用可能な中で、ある特定の形式を選んだ場合のことについてのものではない。つまり、仮に日本語で、「食べ物が出てきた前」「食べ物が出てくる前」という二つの表現が可能であって、後者が選ばれているのであれば、その表現は、その時点に入り込んだ捉え方に基づいたものと言えるかもしれない (逆に前者を選んだ場合であれば、事態を客観的に捉えていると言えるかもしれない)。しかし、そもそも「*出てきた前」という表現が日本語では許されないのであれば、「出てくる前」という表現がなされているという事実から、認識のレベルで、当該の事態の生起時点に入り込んだ主観的な事態把握がなされているとは断言できないだろう、と考えてみたいのである ((2 a) についても同様であり、「*I was made a lot of noise by my neighbor」という表現は非文)。

Ⅲ 事態把握のあり方の反映とされる言語的特徴が言語の統語論的・意味論的な特性から含意されるものである可能性

上記の素朴な疑問から、本稿では、主観的・客観的事態把握に基づいているように見える言語表現の中には、当該の言語の特性によって必然的にそういう形式になっている、いわば「副産物」的なものもあるのではないかと^{注2}、という立場にあえて立て議論を進めてみたい。

Greenberg (1963)⁶⁾ は、言語の類型を行う中で、主に統語的な特徴について、「VSO の言語は常に前置詞的である」のに対して「SOV の言語は後置詞的である」、「VSO 言語は、SVO の語順も許容するが SOV 言語では、他の語順は許されない、許される場合は OSV だけである」といった、「ある言語に X という特徴がある場合、その言語は Y という特徴も持つ」という「含意的普遍性」を数多く示している。本稿では、このような観点から、主観的・客観的事態把握に基づくように見える表現の中には、当該の言語のもつ特性に必然的に含意されるものもあるのではないかと考えてみたい。以下では、そのきっかけとして、「察する」ことを重んじるとされる日本語母語話者の認識のレベルの事態の捉え方と、日本語における名詞修飾節（＝言語表現のレベル）の関係について考えてみる。

1. 高コンテキスト・低コンテキストと名詞修飾節

ホール (1976)⁷⁾ は、言語をコミュニケーションのあり方から、あいまいな表現や含みのある表現を多用し周辺的情報などの手がかりを用いた非言語的コミュニケーションへの依存度の高い「高コンテキスト」の言語と、直接的で明確な表現を用いた言語的コミュニケーションを好む「低コンテキスト」の言語に分けている。その中で、日本語は前者に、英語は後者に属するとされる^{注3}。

日本語が、少ない言語的な手がかりから発話者の意図した内容を推し量る傾向の強い高コンテキストの言語であり、英語は、逆に言語的に明確に事態を叙述する傾向が強い低コンテキストの言語である、という特徴づけは^{注4}、様々な言語現象に説明を与える可能性があるが、その一つとして、下記のような日本語の名詞修飾の文脈依存度の高さを日本語の高コンテキスト性と関連させて論じたものがある（森山2007⁸⁾ など）。

日本語では、以下に示すように、修飾部（の述語）と修飾される名詞（主部：ゴシック体で記す）の統語的な関係を明示する形式を持たず、比較的に自由に結びつく。

- (5) a. [高校入試に絶対受かる] **家庭教師**を探しています。(松本 1993⁹⁾ : 102)
- b. この頃 [トイレに行けない] **コマーシャル**が多くて困る。(ibid.:105)
- c. [突然の別れを告げられた] **空**はとても悲しかった。(神澤2012¹⁰⁾ : 48)
- d. [魚を焼く] **匂い**
- e. [冷たいコーヒーを飲んでいる] **肩**をたたいて… (澤田1996¹¹⁾)
- f. 亭主は [食べてしまった] **茶碗**に湯を注ぎ (ibid.:225)
- g. [なかなか寝つかれない] **頭**をふとんにすっぽり埋めていた小関の (ibid.:225)

一方、英語では、このように修飾部（特にその述部）と被修飾部の関係が、語用論的推論に強く依存する名詞修飾説は成立しない、あるいは、少なくともその関係を明示的に示す（下線部）必要がある。

- (6) a. The commercial [because of which one can go to the bathroom] (sic) (神澤2012:47)
- b. The sky [under which I was suddenly told by her that we were breaking up] looked sad.
- c. * The smell [which Mother grills a fish]

- d. * I patted on his shoulder [which he was drinking a cup of coffee]
- e. * He poured hot water into the rice bowl [he ate up]
- f. * Koseki who was digging her head [which she couldn't sleep] into the bedding

日本語においては修飾部と被修飾部の関係性が推論に依存している部分が多いという事実は、(7)の「本を買った学生」という表現は、(8)のいずれの意味でもあり得、どの解釈であるかは文脈から判断される(Matsumoto 1996¹²⁾)ということからも分かる。

(7) [本を買った] 学生

- (8) a. The student [who bought the book came to me yesterday].
- b. The student [from whom I bought the book came to me yesterday].
- c. The student [for whom I bought the book came to me yesterday].

(樋口2001:63括弧筆者)

このように、修飾部と被修飾部の関係性が明示されていない名詞修飾節が日本語で自由に作れたり、修飾部と被修飾部の関係性が幾通りにも解釈できたりするという事実は、日本語が少ない言語情報から関係を推論する高コンテキストの言語であることにその説明を求めることが可能である(その逆も然りであり、低コンテキストの英語は、両者が推論に依存する様な名詞修飾節を嫌う、という説明が成り立つ)。

2. 名詞修飾節の文脈依存性が日本語の統語論的特性から含意される可能性

このように、たしかに、ある言語において文脈からの推論に依存した名詞修飾節が成立しやすい(しにくい)ということと、その言語が高(低)コンテキストの言語であるということの間には相関関係が認められるように思われる。しかし前者が後者の特性から導かれる、というように両者の間に直接の因果関係があるとは必ずしも言えないのではないだろうか。というのも、この推論依存度の高い名詞修飾節の成立の可否については、日本語が修飾部が被修飾部の前に置かれる「主部後置型」の言語であり、一方の英語が被修飾部の後に修飾部が続く「主部前置型」の言語であるという事実を考慮に入れなければならないと考えられるからである。すなわち、修飾部である事態が先に述べられ、その後その事態の参加者が続く場合には、その逆である場合に比べて圧倒的にその関係は推論しやすいと考えられるのである。例えば、「魚を焼く匂い」であれば、まず〈魚を焼く〉という事態が想起されたあとに「匂い」という語句が現れるのであるから、この「匂い」が「魚を焼く」という文との明確な格関係(統語関係)を持っていないと、両者の関係は容易に関連づけられる。

実際、主部後置型である中国語、韓国語においては、上記の(5)のような名詞修飾節は問題なく成立する。

- (9) a. [トイレに行けない] コマーシャル
- b. [不能 去 厕所 的] CM
- できない 行く トイレ(の)

- c. [화장실 에 못 가 는] CM
トイレ に ない 行け (の)
- (10) a. [突然別れを告げられた] 空
b. [突然 被 要求 分手后 的] 天空
突然 される 求める 別れ (の) 空
c. [돌연히 헤어짐 을 받아 들 인] 하늘
突然 別れ を 告げ られた (の) 空
- (11) a. [魚を焼く] 匂い
b. [烤 魚 的] 味道
焼く 魚 (の) 匂い
c. [물고기 를 굽 는] 냄새
魚 を 焼く (の) 匂い
- (12) a. [冷たいコーヒーを飲んでいる] 肩をたたいて…
b. 拍拍 [喝着 冰咖啡 的] 肩膀
たたく 飲んでいる 冷たいコーヒー (の) 肩
c. [차거운 커피 를 마시고 있 는] 어깨 를 토닥이며
冷たい コーヒー を 飲んで いる (の) 肩 を たたく
- (13) a. 亭主は [食べてしまった] 茶碗に湯を注ぎ…
b. 亭主 [在吃空 的] 茶碗 里 倒 热水
亭主は 食べてしまった (の) 茶碗 に 注ぐ 湯
c. 정주 는 [다먹고 비여버린] 차잔 에 따거운물 을 부으면서
亭主 は 食べて しまった 茶碗 に 湯 を 注ぎ
- (14) a. [なかなか寝つかれない] 頭をふとんにすっぽり埋めていた…
b. [把睡不着 的] 脑袋 一股脑 塞进 被子 里
なかなか寝つかれない (の) 頭 すっぽり 埋めていた ふとん に
c. [잘 잠들지못하 는] 머리 를 이불속 에 쓱 집어넣고 있었다
なかなか 寝つかれない (の) 頭 を ふとん に すっぽり 埋めて いた

一方の英語の名詞修飾節では、まず主部として、事態の参加者が提示され、その後、その参加者が関連する事態が述べられるわけであるから、両者の関係は推論しにくくなると考えられる。例えば、〈赤ん坊が牛乳をこぼす〉という事態から、床、コップ、母親、などは思い浮かべやすいが、〈牛乳〉というモノからは〈飲む〉〈配達する〉〈売ってある〉など全く異なった多様な事態が想定され、〈赤ん坊がこぼす〉という特定の事態だけが予想されるとは考えにくい。つまり、「モノ→コト」という順で提示されるより、「コト→モノ」の順で提示されるほうが、はるかに両者の関連性を見いだす際の労力が小さいと考えられるのである。従って、主部後置型の言語においては、主部後置型の言語に比べ、文脈に依存した名詞修飾節が成立しやすいものと考えられる。

確かに日本語においては「遠慮と察しのコミュニケーション」が重要であるとされ、言語によるコミュニケーションより、むしろ言葉として表現しないことについての察しが重要であると言われる(メイナード1993¹³⁾)。Hinds (1987)¹⁴⁾においても、日本語はコミュニケーションの責任

は受け手側にある「聞き手責任」の言語であり、聞き手が発話の内容を積極的に推論しなければならないとされる。翻って、こうした高コンテキストの言語においては、黙っていることが高く評価され、(低コンテキストの言語においては否定的に受け取られることが多い)「沈黙」は「余韻」として好意的に受け取られる (Samovar et al.2007¹⁵⁾)。

このように、直接的な事態の伝達を避けたいと考えたり感じたりすること、あるいは、「沈黙」に対する意味付けや明示的に述べられない意味内容の積極的解釈などは、確かに〈認識〉のレベルで起こっていることであり、それが、省略やメトニミー的表現といった形式面、すなわち言語のレベルに現れている部分があることは確かであろう。

しかしながら、日本語において、修飾節と被修飾部の関係が大きく文脈に依存するような名詞修飾節が成り立つのは、その日本語の持つ主部後置型という統語的性質によって、いわば物理的に可能になっている部分も大きいと考えられ、省略を好むという認識によってのみ選択された形式ではないと思われるのである。

3. 主観的事態把握の反映とされる相対テンスが「前」「後」などの意味論的な特性から含意される可能性

次に、上記と同様の観点から、冒頭で述べた(1)の日英語表現の違いについても考えてみたい。

(1) a. By the time food came, I got drunk.

b. 食べ物が出てくる前に、酔っぱらってしまった。(再掲)

先述のように(1a)(1b)ともに同じ事態を描いているにも関わらず、従属節の述語が英語では過去形(絶対テンス)、日本語では非過去形(相対テンス)という違いがあるが、これについても、客観的に事態を捉えているか、より主観的に描かれている事態の中に視点を置いて描いているか、という認識のレベルの違いではなく、言語的性質から必然的に生じたという可能性を指摘したい。すなわち、日本語においては、話者が描かれている事態の中に視点を移動させている(入り込んでいる)から、「出てきた」の代わりに「出てくる」という表現を用いているのではなく、必然的にこの形しか許されないゆえにこの形式が選択されている、すなわち認識の反映ではなく、言語的な制約によってこの形式が選択されているという可能性である。

日本語では、従属節と主節を「前」「後」といった語句で繋ぐ場合、(15a)のように、従属節の表す事態、主節の表す事態がともに過去の出来事であっても、両者の述語を過去形で描くことはできない。すなわち従属節の述語を絶対テンスでは描くことはできないのである。同様に(15b)に示すように、従属節、主節の表す両事態がともに未来の出来事であっても、それらをともに発話時から眺め、非過去形(未来形)で描くことはできない。

- (15) a. *食べ物が出てきた前に、酔っぱらってしまった。
b. *ビールが出てくる後、食べ物を注文しましょう。

しかしながら、これは、「前」や「後」といった語句の場合に特有の制約であり、例えば、以下のような(16)～(19)の場合、従属節と主節の事態は共に過去の出来事であるが、いずれも、従属節の事態を相対テンスでも絶対テンスでも描くことができる。

- (16) a. 昨日、本を読んでいる時、おもしろい事実に気がついた。

b. =読んでいた

- (17) a. 京都に滞在している間、ずっと雨だった。

b. =滞在していた間

- (18) a. 先月、ロシアに行く時は、シベリア鉄道を使った。

b. =行った時は

(工藤1995¹⁶⁾: 227下線筆者)

- (19) a. [この仕事でかせいだ] 金は、ヨットを買うために使いたいと思っています。

b. [この仕事でかせぐ] 金は、ヨットを買うために使いたいと思っています。

(砂川1986¹⁷⁾: 78下線筆者)

このように両方の形式が可能であり、その中から一方を選択しているのなら、それは、事態の中に経験者として入り込んで捉えているという認識のあり方が言語に反映されているものと考えられることも可能であろう。さらに、それが特に相対テンスである(16)～(20)におけるaの形式での描写に偏る傾向があるのであれば、日本語母語話者の(認識のレベルでの)事態の捉え方が、そのような主観的把握に偏る傾向があると言えるかもしれない。

しかしながら、そもそも「前」や「後」といった語句につながって行く場合は、絶対テンスでの描き方が許されない訳であり、そうであるならば、主観的に捉えていようが客観的に捉えていようが、その形式が両方の認識のあり方をカバーしていることになる(さきの受動態と能動態の議論と同じである)。

では、なぜ、「前」や「後」がこのような前接する形が制約されるのであろうか。そこには、これらの語句が、空間的な意味から時間的な意味にその語義を拡張してきた過程にあると思われる。「前」や「後」のように時間的な意味を表す語句の多くは、その抽象的な時間的な意味というものを、より具体的な空間的な意味から拡張させてきた。例えば、日本国語大辞典によると、「後(アト)」は、もともと「跡」からの派生であるとされており、「跡」の語義は「ア(足) + ト(処)」であるとの記述がある。それが上代には、<足の方><足で踏んだ所>の意で用いられるようになり、その後、足跡だけでなく、建物の跡など、足によらない具体的、即物的な痕跡にも使用されるようになった。さらに時を経て、「跡」は具体的な痕跡を残さない事象に対しても使用されるようになる。この頃になると、「跡」に対して、「後」という漢字も当てられるようになり、こちらはより純粋な時間関係のみを表すというように、文字による棲み分けが生じることになる。

このような過程に鑑みれば、「あと」の接続助詞的な用法も、例えば以下の様な、空間的にも時

間的にも解釈できるような用法を介して生じたと考えるのが最も自然であろう^{注5}。

(21) a. ライオンがシマウマを食べたあとに、ハイエナが寄って来た。

b. 地面を掘ったあとに、水が溜まっている。

そして、隣接する形式は、よりまとまって一つの形式として捉えやすくなるという言葉に一般にみられる変化に鑑みれば、常に過去形の動詞に承接する上記のような「あと」の用法が、その時間的用法の基盤となって「過去形+あと」で一つの形式としてその用法を確立することは自然なことといえるのではないだろうか^{注6}。

「前」の接続助詞的な用法については、また別の考察が必要であるが、ここで重要なのは、上記のように特定の用法を基盤として語義の拡張が起こり、前接する述語とまとまった形で使用することが制約となったという可能性を考えれば、この「るまえ」「たあと」という表現については、認識のレベルでの主観的な事態把握が反映されていると考えるよりは、言語表現のレベルでの制約と考えた方が自然だと思われるということである。

確かに日本語の相対テンスを用いた描き方は、当該の事態の生起時点に視点を設定している、と解釈することが可能であるように見える。しかし、相対テンスを用いた描き方と絶対テンスを用いた描き方は両立しない場合が少なくなく、更に「るまえ」「たあと」などのように、相対テンスを表していると考えられる形式でのみ事態の表現が可能である場合には、それらの表現形式（事態の描き方）から、必ずしも認識のあり方が主観的である、と結論づけることはできないのではないだろうか。これは、例えば、言語表現のレベルで単複の区別の表示が義務的である英語などの言語の話者が、そうでない言語（例えば日本語など）の話者に比べて、数の区別を認識のレベルでよりはっきりと行っているとは言えないのと同じである。従って、少なくとも相対テンスでの描き方が義務的である日本語のいくつかの表現については、それらが当該の事態の生起時間に視点を設定して事態を描かれたものである、とは言えない可能性があるのである。

IV 結語

以上、本稿では、以下の二点を指摘した。まず、高コンテキスト言語とされる日本語においては、1) 省略を好んだり、推論に依存する度合いの高い言語表現が好まれたりすること（認識のレベル）と、2) 推論に依存する名詞修飾節の容認度の高いということ（言語表現でのレベル）について、1) が2) に反映されているというよりは、2) は、主部後置型の言語である日本語の特性によって生じている（容認度が高くなる）という可能性である。つぎに、日本語では、3) 事態の生起時点に入り込み事態を描くという認識のレベルでの捉え方と、4) 相対テンスと呼ばれる表現形式が多用されること、についても同様に、4) は3) の反映ではなく、主部後置型の言語である日本語において「前」や「後」などの語が接続助詞的な用法を発生させる課程で生じた義務的な表現形式である可能性を指摘した。そして、こうしたことから、日本語においては、事態をより主観的に捉えるという認識のレベルの傾向が近年多く指摘されるが、それはあくまで言語表現から判断するとそう見えるにすぎないのであって、実際にそれらの言語表現が認識レベルでの主観的な事態把握の反映であるかについては、疑問を唱える余地がある、ということ

を述べた。

冒頭でも述べたが、筆者は、言語のレベルに認識のあり方が反映することに疑問を抱いているわけでは決してない。Bollinger (1977)¹⁸⁾ の「意味と形式の一対一対応」を引用するまでもなく、言語表現にはその背後に必ず特定の認識のあり方が存在する。したがって、ある言語と別の言語の間で同じ事態を描いた場合に、形式の用い方の違いや偏りなどが見られる場合には、その母語話者の認識のあり方のレベルにおいて相違がある可能性も確かに考えられる。しかしその一方で、例えば、日本語や韓国語には敬意を表す体系的な言語体系があって英語には（少なくとも同じレベルでは）そのような体系を有していないことから、英語母語話者に〈敬意〉という概念がない（薄い）、と言えるわけではないのも事実である。同様に、モノの単数・複数の違いを義務的に表示する英語の母語話者と違って、日本語母語話者が数の概念（単複の区別）に疎い、意識が低い、ということにも当然ならない。

このように考えれば、近年、盛んに行われている日本語と他の言語における事態の捉え方、描き方の相違についての研究についても、事態の描き方が事態の捉え方（認識のレベル）の相違に基づいているものなのか、あるいは当該の言語の持つ統語論的・意味論的特徴から必然的に生じている相違にすぎないのか、という前提について再度考える必要があると思われる。二つの表現形式が選択可能であり、そのどちらかを選択するかについて言語間に大きな偏りがある、という場合であれば、それは当該の言語話者の認識のあり方の違いに起因するという可能性は考えられるが、本稿で述べてきたように、日本語における名詞修飾節の推論への依存度の高さや相対テンスを用いた事態の描き方については、あくまで言語表現のレベルで生じている相違である可能性も十分に考えられるのである。従って、言語表現の相違から認識のレベルでの事態把握の様式の違いを帰納的に推論した一連の研究には、今後何らかの形で、言語表現の相違以外の証拠を提示する必要が生じてくるものと思われる。本稿での拙い一考察が、この分野の研究がこれから更に広がりを見せることに少しでも貢献するものであれば幸甚である。

【脚注】

注1 池上（2006）は、以下の日英語対訳に現れるように、英語ではaのように事態を「外に身を置いて（中略）客体として捉え（p195）」るのに対して、日本語ではbのように、事態を「いままさに体験していること（p195）」として語ることを指摘する。

a. The train came out of the long tunnel into the snow country.

b. 国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。（池上2006：195）

池上嘉彦『英語の感覚・日本語の感覚』、日本放送出版協会、2006

注2 「副産物」という表現によってその重要度が低いとか、そのようなことを意味するものでももちろんない。

注3 Samovar et al. (2007) では、日本語は高コンテキスト性の最も高い言語とされる。

注4 We might say that English speakers tend to over specify verbal content whereas Japanese speakers tend to underspecify verbal content. (Hinds 1986: 26)

注5 時間を空間に見立てて捉えている、というだけでは、「あと」に時間的意味があって「うしろ」にないのか、「Before」にあって、「front」にないのかについて説明ができない。筆者は伊藤（2010）で、(21)のような両義的用法が確立されたあとに、その類義関係から、例えば「うしろ」「front」などに時間的用法が拡張していく可能性を述べた（実際に、「うしろ」には、過去には時間的用法をもっていたことがある。これについても伊藤（同）を参照頂きたい）。

注6 一方、「前」については、三宅（1989）によると、上代から中世にかけては「先」が<以前>の意を表

しており、「前」の使用は見られなかったという。すなわち、現在、「前」が担っている純粋な時間的前後関係を表したり、単に〈発話時以前〉を表したり、という機能を、「前」が時間的意味を持つ以前には、「先」が担っていたと考えられ、この〈以前〉を表す語について、「先」から「前」への移り変わりなどについては、伊藤（2010）を参照されたい。

【引用・参考文献】

- 1) 池上嘉彦『「する」と「なる」の言語学』, 1981
- 2) 金谷武洋『日本語にも主語はなかった』, 講談社選書メチエ, 2004
- 3) 樋口万里子「日本語の時制表現と事態認知視点」, 『九州工業大学情報工学部紀要, 人間科学篇』14-3, 53-81頁, 2001, 九州工業大学
- 4) 池上嘉彦・守屋三千代『自然な日本語を教えるためにー認知言語学をふまえて』, ひつじ書房, 2010
- 5) 守屋三千代「広告における受益可能表現ー〈事態把握〉の観点よりー創」『価大学日本語日本文学』21, 19-32頁, 2010
- 6) Greenberg, Joseph H. "Some Universals of Grammar with Particular Reference to the Order of Meaningful Elements." *Universals of Language*. Cambridge, MA : The MIT Press. 73-113, 1963
- 7) Hall, E. T. 『Beyond Culture』Anchor books, 1976, [邦訳 岩田慶治 谷泰訳『文化を超えて』, TBSブリタニカ, 1979]
- 8) 森山新「認知言語学的観点による日本語の連体修飾研究ー連体修飾節・ノを用いた連体修飾を中心にー」『日本文学』72-6, 41-58頁, 2007
- 9) 松本善子「日本語名詞句修飾構造の語用論的考察」『日本語学』12巻12号, 101-114頁, 1993
- 10) 神澤克徳「外の関係を中心とした日本語連体修飾の分析ー対照言語学的観点から」『言語処理学会 第18回年次大会 発表論文集』, 46-49頁, 2012
- 11) 澤田和浩「連体動詞句研究の検討」『日本語文法の諸問題ー高橋太郎先生古希記念論文集ー』, 219-238頁, 1996
- 12) Matsumoto, Yoshiko "Interaction of factors in Construal; Japanese relative Clauses," *Grammatical Constructions*, Oxford, 103-124, 1996
- 13) メイナード, 泉子・K『会話分析 (日英語対照研究シリーズ (2)), くろしお出版, 1993
- 14) Hinds, John "Reader versus writer responsibility : A new typology", In U.Conner and R.B.Kaplan (eds), *Writing across Languages: Analysis of L2 Text*, Addison-Wesley Publishing Company, 141-152, 1987,
- 15) Samovar, L.A., Porter, R.E. & McDaniel E.R. *Communication Between Cultures (6th ed.)*. Belmont, CA : Thomson Wadsworth., 2007
- 16) 工藤真由美『アスペクト・テンス体系とテキスト』, ひつじ書房, 1995
- 17) 砂川有里子『日本語文法セルフマスターシリーズ 2 する・した・している』, くろしお出版, 1986
- 18) Bollinger, Dwight, *Meaning and Form*, Longman Higher Education, 1977 [邦訳 D. ボリンジャー 中右実 こびあん書房, 1981]